慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ポンテュス・ド・ティヤール(1521-1605)とミシェル・エイケム・ド・モンテーニュ(1533-1592)における知識の捉え方の違い
Sub Title	Le traitement des connaissances : les cas de Pontus de Tyard (1521-1605) et de Michel Eyquem de Montaigne (1533-1592)
Author	小池, 美穂(Koike, Miho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.182(125)- 198(109)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0198

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポンテュス・ド・ティヤール（1521－1605）とミシェル・エイケム・ド・モンテーニュ（1533－1592）における知識の捉え方の違い

小池　美穂

1. はじめに

モンテーニュという文学史上大きな存在に対しティヤールはマイナーな詩人である。しかし、近代文学史の忘却からようやく脱出しつつある[1]。

何故モンテーニュとティヤールなのか。まず、一つの事実と仮説が存在する。実はモンテーニュの『エセー』の第二版（1588年）は、パリの大手出版社アベル・ロンジュリエで刊行されているが、その前の年（1587年）にティヤールが、6冊の対話形式で書かれた哲学書を収集した『哲学論』を同じ出版社で世に出している。そこで2人が出会った可能性は大いにあり、一緒に討論し、互いに影響しあったかもしれない。モンテーニュに対してティヤールには説明がいる。

ポンテュス・ド・ティヤール（1521あるいは1522－1605年）は聖職者、詩人、哲学者であり、マコンの町の北に位置する村のビシー＝シュール＝フレで生まれる。モーリス・セーヴが率いるリヨン派の詩人として活躍し、その後はパリでも認められ、やがてプレイヤッド派に属することになる。1570年代に入ると宮廷に出入りし、シャルル9世のもとで詩と音楽のアカデミーの一員となり、特にアンリー3世からは信頼を寄せられ、1577年に王の教育のために設立された王室アカデミーで自然哲学の講義を行っている。後半世の著作は、すべて対話形式で詩と音楽、宇宙論、神学、暦、占星術などを百科全書的に扱っている。そのなかで自然哲学書である『穿鑿

好きの対話その一』を扱う。当然そうなると、モンテーニュの『エセー』のなかの「レーモン・スボンの弁護」が出てくるわけだが、当時の知のあり方を一番特徴的に見せてくれる自然哲学・天文学の箇所を取り上げて述べていく。

『穿鑿好きの対話その一』は、対話形式で書かれ、3人の人物、聖職者のイエロムニーム、哲学者の「穿鑿好き」そして哲学者兼詩人の「隠者」が登場する。彼らの間で宇宙を主題とした様々な会話が飛び交うのである。会話自体即興的で偶発的に見えるものの、実は登場人物たちはプトレマイオスの宇宙の構造に従って話しを進めている。第8の天、7つの惑星、そして4大元素、大宇宙からその構成要素まで、順を追って説明していく。この書物は自然哲学書であるものの、天文学の領域にも食い込むことで、複雑な書物となっている。

ルネサンスの自然哲学書は、アリストテレス（*De Cælo*『天空について』）とプラトン（*Timée*『ティマイオス』）を折衷したものが主流であった。天文学書としては、プトレマイオスの『アルマゲスト』が主要な教科書として用いられていたが、内容自体が容易ではなかったため、分かりやすく要約された教科書が使われた。天球の研究についての代表的な教科書としては、ヨハネス・サクロボスコ（13世紀のイギリスの天文学者）の『天球論』が、惑星の理論としてはゲオルク・プールバッハ（15世紀のオーストリアの天文学者）の『惑星の新理論』が挙げられる。この2冊の入門書から新たな手引き書が生まれ、天文学書に自然哲学書を混ぜ合わせた書物も出現する。『穿鑿好きの対話その一』もそのなかの1冊である。新しい宇宙論も紹介しつつ、伝統的なプトレマイオスの注釈者たちから受け継いだ宇宙論を提示し、星や惑星の動きを数値化し、さらにアリストテレス派の哲学を導入し、自然現象の原因を探っている。しかし、この書物の大部は4大元素の描写で埋め尽くされ、天文学書というより自然哲学書に近い形となっている。

そのような複雑な様相を呈する書物ではあるものの、時代を反映した宇宙の捉え方を読者は垣間見ることができる。印刷術の発達により、様々な

知識がいろいろな領域に組み込まれ、航海技術の発達が新大陸の発見に貢献し、カトリックが唯一の宗教ではなくなり、古い知識が新しい知識に改められた時代である。特に、天文学の領域では、1543年のコペルニクスの『天球回転論』の刊行が地動説理論を提示し、伝統的な天動説を覆す結果となった。ティヤールの書物もこのすさまじい知識の変動を無視することなく扱い、そこでは、古い知識と新しい知識が時には共存し、時には対立する。当時の知識人は膨大な情報の中から何が真実であるのかを見極める必要があるものの、判断を下すのが大変困難なので、疑うことから始めて、観測等で確かなものを求めねばならなかった。ルネサンスにおいて、懐疑主義が盛んになるのも驚くことではない。そもそも学問に励むものであるならば、あらゆる事柄を「疑う」ことは当然のことであるが、モンテーニュとティヤールは、どのように知の不確実性と対峙しているのだろうか。彼らの知識は一般的で、懐疑自体も新しくない。特に天文学の領域においての不確実性はプラトンから始まり、古い伝統に従っている[2]。しかし、同じ内容といえども、彼らの知識の捉え方は異なっている。具体的にどのように各自が語っているのか示していく。

本題を論じる前にまず懐疑論に対するティヤールの考え方を簡潔に述べる。

2. ティヤールは懐疑主義者か

ルネサンスにおいては、懐疑主義の重要性とその思想の影響力に関する多くの研究がなされてきた[3]。

イザベル・パンタンは、コペルニクス論の中で、16世紀における2つの知のあり方を提示している。

> あらゆる確実な事柄の正当性を疑う悲観的な傾向と、先例の廃墟の上に新たな知識の土台を構築しようとする傾向との違いを際立たせることにある[4]。

この「悲観的な傾向」は懐疑主義に相当する。このような考え方は、ルネサンスにおいて真新しいことではない。中世は、とりわけ聖アウグスティヌスの書き物を通して、「科学」的な好奇心に疑いを持ち、理性を軽視する傾向があった。しかしながら、様々な要因が16世紀における懐疑主義の発展に寄与した。主にスコラ神学を徹底的に見直す宗教改革や、古代の「ピュロニズム」に対する知識が徐々に具体性を持ち、ディオゲネス・ラエルティオス（3世紀前半ごろ）とセクストゥス・エンピリクス（2世紀－3世紀）により、数学そして自然科学の発展が、伝統的な知の欠落に焦点を当てるのである。

特に天文学の領域における批判的な代表作品として、コルネリウス・アグリッパの *De Incertitudine et Vanitate scientiarum et artium atque excellentia Verbi Dei declamatio*[5], がある。天文学者は、「思い上がった、不思議で驚異的な事柄を作り出す人たち」であり、天文学は「誤ったもので無に等しい」[6]ことを証言している。オジアンダー（1498-1552）は、「読者への序」をコペルニクスの『天球回転論』(1543) の書物に付け加え、異端審問にかかる恐れから、天文学という学問は一つの真実ではなく、仮説にしか過ぎないと書き記した[7]。モンテーニュは、「レーモン・スボンの弁護」のなかで、天文学の虚構性をさらに強調する[8]。16世紀では、ギ・ド・ブルエス[9]をはじめとする何人かの哲学者は、アリストテレスの3段論法を用い、「誤った前提」から、「真実」にたどり着くことができることを示している。これは「真実味」のある理論が誤った仮定[10]から成り立っている可能性があることを示唆している。ニコラス・ジャルディーヌ[11]によると、人間が天空とその動きを理解することができないのは、宇宙を考察する上で、哲学者と天文学者が、それぞれ異なった基準を持っており、両者の間にズレが生じるためである。

ティヤールが懐疑主義であるかどうかについて様々な研究がされてきたが[12]、ポンテュス・ド・ティヤールの懐疑主義を画一的に扱うのは難しいと考える。そもそも、登場人物の役割が書物によって一定ではない。「穿鑿好き」はティヤールの他の作品『マンティス』のなかではどちらかという

と懐疑主義者として登場するものの、『穿鑿好きの対話その一』の中では、彼は哲学が獲得可能にする知に信頼を置いている。

ティヤールの作品『穿鑿好きの対話その一』を述べる前に、モンテーニュの作品『エセー』で、知識の不確実性について語り、最後にティヤールのあいまいさの表現と比較することで、ティヤールの表現の独創性を提示する。

3. モンテーニュの作品『エセー』における知の不確実性

すでにモンテーニュの天文学への批判に序文で言及したが、具体的にどのように表現されているのかを具体的に考えることにする。まず重要なことは、モンテーニュの宇宙の捉え方である[13]。人間は自然が直接われわれに真実を明かさないため、この目で宇宙を確認できない。人間はただひたすら、自然のなかで、すでに存在する様々なものから類推して想像するしかない。例えば、太陽の素材は以下のようなものから形成されている。

> もしもあなたが、哲学に向かって、「太陽はなにからできているのですか？」と質問してみれば、鉄とか石とか、あるいは、われわれが使っている別の物質の名前が返ってくるに決まっている[14]。

ここでは知られていないもの（太陽の素材）は知られているもの（鉄、石、生地）で補われ、未知の世界は解明されることなく、謎のままで残される。さらに、人間は宇宙の仕組みを、想像する以外では考えられないため、真実を歪曲し、「偽り」のなかで物事を述べていかなくてはならない。

> たとえば、惑星の運動だが、われわれの精神では、惑星がどうやって自然に動いているのかを、具体的に把握もできなければ、想像もできないために、われわれは自分の権限でもって、それらの惑星に、鈍重なる身体的ならびに物質的な原動力という、おのれの基準をあてはめるのである[15]。

モンテーニュにとっての想像は、本来の宇宙の姿をゆがめてしまう危険性を持ったものである。それはちょうど、文体を装飾することで真実を覆ってしまう詩と似ている。最終的に、「哲学というのは、詭弁を弄する詩にすぎない」[16]。他にも自然哲学批判として、「いつわりの形を付与するのは、笑止千万なくわだてではないだろうか」、「どれもこれも、夢想であり、熱に浮かされた虚妄にすぎない」などの名言がある。

実は、上記で述べたように自然哲学批判は一つのトポスにしか過ぎない。この箇所を書く際にモンテーニュは他の著者の言葉を援用しているが、特にコルネリウス・アグリッパに頼っていることがジャン・セアール版で分かる[17]。モンテーニュはアグリッパの『学問の不確実さと空しさについて』のなかの30章「天文学について」を読んだように思われる。そのなかで、天体に関するいろいろな説があり一つの理論を形成するに至っていないこと、また星の観測データから理論を導き出すことは、あいまいな学問を生み出す温床になっている、など否定的な口調で述べている。しかし、あいまいさを強調しつつも、一方では不確実と自らが見なす部分（惑星の数、第8の天と恒星の動き、惑星の動き、太陽の動きなど）を確実な筆致で描写している。

コルネリウス・アグリッパとモンテーニュは人間の無知を浮き彫りにしているものの、根本的に2人の著者の不確実な事柄の表現方法は異なっている。

モンテーニュの場合、天文学的知識そのものを述べるのではなく、天文学知識の不確実性と、哲学におけるそれを重ねあわせている。例えば、天空の様々な動きについて、全てが人間によって想像されたものであることを『学問の不確実さと空しさについて』を題材に採ってモンテーニュは以下のように述べる。

> たとえば天文学は、星辰の運行を導くのに、周転円、偏心軌道、同心円などを援用して、これらが、この問題に関して考え出した最良の概

念だとして、提示してくる。同様にして、哲学もまた、存在するものや、哲学が信じるものではなく、もっとも信憑性があって、エレガントなものを捏造して、われわれに示すのだ[18]。

このように、天文学も哲学も、見せかけにこだわり、もっともらしく「捏造」し、真実をわれわれに提示することができないということを読者に訴える。面白いことに「周転円、偏心軌道、同心円」などの単語は、ほとんどそのままコルネリウス・アグリッパから引用している[19]。コルネリウス・アグリッパはこれらの単語を用いて様々な意見を並置してみせる。こうして、コルネリウス・アグリッパは天文学をただ批判しているのではなく、どの意見が正しいのか、誤っているのかを判断するのが困難であることを示しているのである。モンテーニュは、彼の用いた用語のレベルを変え、判断基準に重点を置くのではなく、人間が真実にたどり着くことができないことの空しさをわれわれに暗示している。しかし、モンテーニュが最も重要視しているのは、空しいからといって、その状況に甘んじていてはいけない、という点である。要するに、われわれは、すでに多くの人が述べている考えや理論をそのまま受け入れるのみで、われわれは自分が何者であるのかを知ることさえできないでいる。

にもかかわらず、だれもがわかったような気になって、疑いを差しはさまない。人間の考え方というものは、伝統的な思いこみを受け継いだ権威や信用というものの力により、まるで宗教や法律のように受けいれられてきたのである。われわれは、一般的に信じられていることを、まるで呪文のように受けいれて、その真理を、論証も証拠もひっくるめて、がっしりした堅牢な建物として認めてしまい、二度とこれを揺さぶったり、判断したりしないのである[20]。

ここで、モンテーニュは宗教と法律以外の領域には絶対的な知識のようなものはないので、一般的な考えに満足することなく、あらゆる事象に関

して問題意識を持つ必要があると説いている。

4.『穿鑿好きの対話その一』におけるあいまいな知の表現

ティヤールの書物『穿鑿好きの対話その一』における知のあいまいさの認識は、コルネリウス・アグリッパと同様、主に天文学的知識を語る際に用いられる。

a. 懐疑の表現：地球の測定と惑星の問題

『穿鑿好きの対話その一』における知識の不確実性は惑星の大きさやその計測にも及んでいる。例えば、惑星の特徴を語る際に地球の大きさに対し、他の惑星の大きさを推算しているところがある。そこでは「穿鑿好き」が、新旧の考え方および双方の考え方の両方を提示している。プトレマイオスの『アルマゲスト』によると、太陽の大きさは「地球の大きさよりも170倍、あるいは少なくとも166倍」[21]であるとされ、コペルニクスは太陽が地球の「162倍」の大きさであると考えている。第2版（1578年）では、各惑星の大きさの問題に地球の中心と各惑星との距離についての考察が付け加えられる。

> 世界を測るための単位として地球の直径を考案したのち、何人かは（私が、何人と言うのは、全員が同じ意見ではないからです）地球の中心から、月の天の凸面まで、あるいは、水星の天の凹面までの距離が地球の直径の約32倍ほどの大きさと同じぐらいの空間に相当するとうけ合いました。彼らは［天文学者］は残りの計算を続け、地球の中心を出発点として、金星の凹面まであるいは水星の凸面までの距離が、地球の直径の約84倍、そして金星の凸面までは558倍に相当するとしました[22]。

しかし、この測定は確かなものではないことを「穿鑿好き」は指摘する。

確かに、地球の直径とその円周の割合が定かでないので、彼ら［天文学者たち］の仮説は信憑性のないものとなります。というのも、私が考えていることをあなた方［隠者、イエロムニーム］に言わせてもらいますと、惑星の大きさの数字が合わないことから生じる矛盾は未だ完全に信頼を置けるものではないと言わざるを得ないからです[23]。

様々な惑星の大きさを求めるが、すべての値が異なるため、どの大きさが正しいのかを判断するのが難しいことを「穿鑿好き」は示す。さらに、書物の最後の部分で「穿鑿好き」は地球の大きさを詳述する。各国が様々な単位を使用しているので地球の大きさも様々であり混乱を巻き起こす。最終的に、「地球の完全な丸み」の計測について、「穿鑿好き」は「深く疑う」ことになる。彼はここで新たに「矛盾」という言葉を用いることで、異なる哲学者の地球計測のズレを示し、どれが正しいのかわからなくなる。

一方で、「隠者」は第8天の動きに関する矛盾を指摘する。

断言して言えることでしょうと私［隠者］は再び言った。プトレマイオスはアリスティユスとティモカリスの観測を疑い深いものであると見なしているものの、彼らの観測を土台にしています。またさらに、プトレマイオスはヒッパルコスとメネラウスの観測にも頼っていて、彼らもアリスティユスとティモカリスたちの観測に基づいています。そのようなわけでプトレマイオス自身、まちがって計算した可能性があります。というのも、このような観測による計算結果は同じ数値が出てこないからです[24]。

「隠者」は、第8の天の動きについてのあいまいさは地球からの距離が大きいからである、という伝統的な理由にしたがっている。プトレマイオスはこの天体理論を修正しないで、先人の観測データの過ちだけを指摘した。天空の素材[25]についての討論のところでも、「隠者」は既存の知への信疑を露に表明している。

そもそも、私の意見に反する他の説明を見つけるのは可能ですが、あなたに本当のことを打ち明けますと、何人かの天文学に関する説明の信憑性を私は深く疑っています。これらの説明は軽くまとめられていますが迷信をあり所にしている考え方のように自然の原理を考慮していません[26]。

「自然の法則」に従わず、迷信の言うがままに宇宙について述べようとする態度は知的に確実なものとはいえない。ところが、同じティヤールが、迷信が信憑性に欠けるところがあると言いながら、実は4大元素の部分では長々とこの迷信を取り込んで述べている。

b. 不確実性の原因と楽観主義的思考

ティヤールは同書のなかで、天文学という学問自体の持つあやうさに言及する。「隠者」は、モンテーニュ同様、人間は宇宙の真実を捉えることができないと気づく。というのも、惑星の動く速度に比べて、人間の一生はあまりにも短い。さらに天体観測機の精度がまだ十分高くない。そこで「隠者」は以下のように結論づける。「この世紀には、天文学理論の数と同じぐらいの数の天文学者がいる」と。実はこれらの意見は、すでにプトレマイオスの『アルマゲスト』のなかで取り上げられている考え方である。

しかし、この研究［惑星の動き］は、いくつかの理由から大変難しいものとなっている。というのも、まず、古代の研究者は最後まで仕事を成し遂げられなかったからだ［……］。次に、惑星を観測するようになってからの時間は、扱う主題の大きさと比べると短すぎるので、長い目でみて、前もって何か確実に決定できない[27]。

しかし、この知識の混乱はわれわれが想像するほど深刻ではない。「穿鑿好き」は天文学的知識のなかでよく信頼できる知識もわれわれに示して

いる。

「穿鑿好き」は続けた。これらの多様な意見［天文学の意見］は、なんらかの不確実性を表しているにしても、最も必要で、明白な知識は残っています。それは、［世界の惑星を描く際に］存在する円［赤道線、横道12宮など］の構成、第8の天に現れる星座の描写、そして、惑星の順序です[28]。

一方で、「穿鑿好き」の楽観的な考えがときどき顔を出す。彼は天空の音など存在しないという論証に、さらに以下のことを付け加えている。

従って、実際のところ、ただ、われわれは天空と距離的に離れているだけではなく、感覚や知性でもかけ離れています。それが、あまりにもかけ離れているので、天空に存在するものは、われわれにとって判断が大変難しく、さらに言えば、確かな判断が下せないのです。しかし、この困難さは、われわれを恐れさせてはならないし、また研究は、優れたそして高潔な精神を持つ人が、常々熱心に取り組んでいるものであるゆえ、そこから遠ざけさせてはいけない[29]。

人間と天空との距離があまりにも大きいため、われわれには判断できない事柄が多く存在する。しかし判断できないからと言って、決して探究心が消え去るわけではなく、知識の獲得を阻むものではない。さらに、モンテーニュと同様ティヤールは、一般の人の考えは必ずしも正しいとは限らないことを指摘する。ここでは登場人物の「隠者」が第8の天について、様々に飛び交う意見に真偽判定を下すのはむずかしいことを明かしている。

率直なところ、私［隠者］は言う。あまりにも多くの意見があるため、第八の天の動きについて確実性を持ち、間違いなしに話すことはでき

ないと思っています。というのも、最も権威がない者たちが最も理性があり、最も権威があると認められている者たちは、自らの論のなかでさ迷ってしまうからです[30]。

隠者は、権威がある意見が必ずしも真実とは限らないことを読者に知らせている。探究している間に起こる疑い、そして誤って物事を解釈することは決してティヤールにおいて悲観的な知的活動ではない。例えば、4大元素の対話のなかで空気中に起こる一つの現象である稲光りについても、様々な解釈が古代から存在する。稲光りはどのようにして起こるのかという質問に、「穿鑿好き」はいくつかの理由を述べている。ある人たちによると、雲に留まった太陽の光線の熱で発生するものである。クリデムスによると、稲光りとは弱い光で、雲のなかで風に吹かれた湿気によって生じる光のことである。そして、雷鳴の話しに移る。

これらの意見以外、(いかに他人の過ちが容易に真実の扉を開いてくれることか)、以下のことを述べるほうがもっともらしいと思われます。雷鳴は、熱く、乾燥した蒸気が互いに激しくぶつかり合い、雲に激しく衝突して発生します[31]。

こうして「穿鑿好き」は、稲光りがどのように起こるのかについて2つの説を述べたあと、最も真実味があると思われる雷鳴に関する説を取り上げる。彼が最初にわざわざ信憑性のない説を取り上げたのは、「他人の過ちが容易に真実の扉」を開くからだ。モンテーニュなら「他人の過ち」の段階で知の不確実さを説くだろうが、「穿鑿好き」は、複数の可能性をさぐり、過ちを犯すことで人は様々なことに気づき、最後には真実に近づくことができると考える。

5. 結論

ティヤールとモンテーニュは、時代が少々異なるものの(『宇宙論』(1557

年）の出版と『エセー』（1580年）の間におよそ20年の差はある）、知識の捉え方が類似している。すなわち、ものごとを考える上で、人間は知識の獲得に対して受動的であってはならない。あらゆることに疑問を持ち、疑うことが求められる。しかし、知のあいまいさの描き方はそれぞれ異なっている。モンテーニュは、人間が決して真実にたどりつくことができないことを前提において、物事を考える必要性を訴える。ティヤールは、真実にたどり着くことを信じて、世界を捉えていく。さらにティヤールは、探究の難しさを指摘しながら、自然哲学と天文学において、確かなものも存在することを明確に述べている。

モンテーニュは哲学者らしく、人間の空しさを強調しつつ、物事を客観視できる人間の普遍的性質を尊重する。ここでは、無知の知のなかに知恵があることを示している。ティヤールは哲学者でありながら、「科学者」のように、真実の存在を前提として、希望を持ちながら研究に励む。

同じ懐疑でも、モンテーニュは知識に対する人間の本質的なあり方を示唆するのに対し、ティヤールは学問の具体的な内容まで詳述することで諸概念の定義とその実践方法を読者にわかりやすく示している。これらのルネサンス的知の到達点が、次の世紀にどう受け継がれるか。2人の作家には、近代を理解する大きなヒントが隠されているのではないだろうか。

註

1　すでに、ティヤールの文献についてシルヴィアヌ・ボクダムが述べているが、（Sylviane Bokdam, *Bibliographie des écrivains français. Pontus de Tyard*, Paris, éd. Memini, 1997）それ以降、ションピオン社とクラシック・ガルニエ社でティヤールの全集の出版が始まっている。（Le tome I (Champion, 2004), réalisé par S. Bokdam, E. Kushner, G. Mathieu-Castellani, J. Ritch et F. Rouget, comprend les oeuvres poétiques, y compris le *De Coelestibus asterismis poematium* dédié à Ronsard en 1560, et les *Douze Fables de Fleuves et Fontaines*, le tome IV-1 (Garnier, 2010), réalisé par Jean Céard, donne le *Premier Curieux*, le tome VI (Champion, 2007), préparé par Marie-Madeleine Fragonard, François Roudaut et François

Rouget, comprend les *Homélies*, l'*Histoire d'Herodian*, la *Lettre au jésuite Charles*, la *Généalogie de Hugues Capet*, l'*Advis du diacre Agapet*, les *Modèles de phrases* et les *Lettres d'amour*), le tome VII (Champion, 2007), préparé par Jean Céard et Jean-Claude Margolin, présente le dernier ouvrage que Tyard a laissé au monde le *De recta nominum impositione (La Droite Imposition des noms)*).

2 目に見える天体の動きから、仮説を作り出すというプラトンの思想から始まり、アリストテレスもこのプラトンの方法を認めている。様々な仮説が打ち立てられていくが、徐々に困難さに増していき、プトレマイオスの宇宙論にたどり着く。しかし、あまりにも理解しづらい理論になっていたため、14世紀ごろ様々な工夫が施されるなか、イタリアのアベロエス主義者はプトレマイオスの理論に反論し、真実とはほど遠い仮説になっていることを示す。ただ目に見える天体の動きを救うために作られた仮説にしか過ぎず、それが必ずしも真実ではないことを告発し、天文学という学問に対し疑いをかける。Cf. Pierre Duhem, *Sozein ta phainomena : essai sur la notion de théorie physique de Platon à Galilée*, Paris, Librairie philosophique J. Vrin, 1990.

3 Richard H. Popkin, *The History of Scepticism from Erasmus to Spinoza*, Berkeley, University of California Press, 1979 ; Charles Bernard Schmitt, *Cicero Scepticus : a study of the influence of the Academica in the Renaissance*, The Hague, M. Nijhoff, 1972 ; Nicholas Jardine, *The Birth of History and Philosophy of Science*, Cambridge, New York, Cambridge University Press, 1984 ; Nicholas Jardine, « Scepticism in Renaissance Astronomy : A Preliminary Study », *Scepticism from the Renaissance to the Enlightenment*, Wiesbaden, Harrassowitz, 1987 ; Letizia A. Panizza, « Lorenzo's Valla De vero falsoque bono, Lactantius and oratorical scepticism », *Journal of the Warburg...*, 41, 1978, pp. 76-109 ; Luciano Floridi, « The diffusion of Sextus Empiricus's works in the Renaissance », *Journal of the history of ideas*, 51, 1995, pp. 63-85 ; Ann Hartle, « Montaigne's Scepticism », dans *La Philosophie et Montaigne, Montaigne Studies*, 12, 2000, pp. 75-90.

4 Isabelle Pantin, « Valeur et statut du paradoxe dans la controverse copernicienne », *L'Ecriture du texte scientifique au Moyen Age*, Paris, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, 2006, p. 156.

5 Henri Corneille d'Agrippa, *Splendidae nobilitatis viri H C Agrippae de incertitudine & vanitate scientiarum & artium, at excellentia verbi Dei, declamatio*, Antverpiae, I.Grapheus, 1530.

6 Henri Corneille d'Agrippa, *Declamation sur l'incertitude, vanité, et abus des*

sciences traduite en François du Latin de Henry Corneille Agrippa, Paris, Jean Durand, 1582, pp. 120-121.

7 Andrew Dickson White, *History of the Warfare of Science with Theology in Christendom*, London, MacMillan, 1896, pp. 122-123.

8 « elle [la science] nous donne en payment et en presupposition les choses qu'elle mesmes nous aprend estre inventées : car ces epicycles, excentriques, concentriques, dequoy l'Astrologie s'aide à conduire le bransle de ses estoilles, elle nous les donne pour le mieux qu'elle ait sçeu inventer en ce sujet ; comme aussi au reste la philosophie nous presente non pas ce qui est, ou ce qu'elle croit, mais ce qu'elle forge ayant plus d'apparence et de gentillesse ». Michel de Montaigne, *Les Essais Livre II*, (Pierre Villey, Verdun-Louis Saulnier) Paris, Presses Universitaires de France, 1999, p. 537.

9 ギ・ド・ブルエスは自らの書物 *Dialogues contre les nouveaux académiciens* のなかで、天文学は誤まった仮設から真実を導き出していることを告発している。Cf. Guy de Bruès, *Les Dialogues de Guy de Brues contre les nouveaux Academiciens, que tout ne consiste point en opinion. Dediez à Tresillustre & Reverendissime Cardinal, Charles de Lorraine*, Paris, Guillaume Cavellat, 1557, p. 68.

10 Nicholas Jardine, *The Birth of History and Philosophy of Science*, éd. cit., pp. 211-212.

11 Nicholas Jardine, « Scepticism in Renaissance Astronomy : A Preliminary Study », art. cit., pp. 83-7.

12 フレデリック J. バウムガートナー (Frederic J. Baumgartner, « Scepticism and French interest in Copernicianism to 1630 », *Journal for the History of Astronomy*, XVII, 49, 1986, pp. 77-88) は、ティヤールを「控え目な懐疑主義者」としているが、シルヴィアヌ・ボクダム (Pontus de Tyard, *Mantice*, éd. Sylviane Bokdam, éd. cit., p. 9) は、ティヤールは懐疑主義者ではない、と主張する。パリの知的サークルに懐疑主義が浸透し始めたとき、ティヤールは、1556年パリでこの知的「流行」を知っていたに違いないことをボクダムは書き記している。しかしながら、「1557年に刊行された『宇宙論』の序文は […] 懐疑主義思想に対する猛烈な反発の表現であるかもしれない」と指摘する。

ジャン・セアール (Pontus de Tyard, *Oeuvres complètes, Tome IV, 1, Le Premier Curieux*, éd. cit., p. 2) は、シルヴィアヌ・ボクダムと同じく、ティヤールが懐疑主義者ではないことを述べている。セアールは懐疑主義を以下のように定義づけている。「人間は、真実に近づくことができないという確信をもち、探究心を失ってしまうほど」であると。このこと

をコルネリウス・アグリッパは『学問の不確実さと空しさについて』という作品のなかではっきりと示している。コルネリウス・アグリッパにとって、様々な考えは不確実さを反映しているものの、『穿鑿好きの対話その一』のなかでは、「全体の観察を考慮する仮説を立てるための努力」(Ibid., p. 22) の証であると言っているため、不確実の意味がティヤールとアグリッパの間では異なるのである。

13 ここでは「レーモン・スボンの弁護」のごく一部分を取りあげて説明を試みる。取り上げる箇所は、人間の愚かさを訴え、決して真実を知ることができないことを、自然哲学と天文学の領域を用いて説明している所である。ミシェル・ド・モンテーニュ『エセー４』(宮下志朗訳)、白水社、2010年、pp. 174-182.

14 同、p. 174.

15 同、p. 176.

16 同、p. 177.

17 Montaigne, *Les Essais*, (édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin), Paris, Le livre de poche, 2001, p. 836 ; p. 838 ; p. 840 ; p. 841 ; p. 842.

18 ミシェル・ド・モンテーニュ『エセー４』(宮下志朗訳)、p. 178.

19 Cornelius Agrippa, *Declamation sur l'incertitude, vanite et abus des sciences*, « De l'Astronomie », Paris, Jean Durand, 1582, pp. 126-127. « Davantage, il n'y a aucun Astrologue qui aye encor sceu dire que c'est que le cercle lactee, que l'on appelle le chemin de Sainct laques. Je passe aussi ce qu'ils disent des eccentriques, concentriques, epicycles, retrogradations, trepidations ou tremblements, accez & esloignements, ravissement, & autres especes de mouvements, & des cerceaux descrits par iceux mouvements,...». ジョン・セアール版も参照。Montaigne, *Les Essais*, (édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin), *op. cit.*, p. 836.

20 ミシェル・ド・モンテーニュ『エセー４』(宮下志朗訳)、pp. 181-182.

21 Pontus de Tyard, *Deux Discours*, Paris, Mamert Patisson, 1578, f. 25 v°.

22 *Ibid.*, f. 26 r°.

23 *Ibid.*, f. 26 v°.

24 *Ibid.*, f. 11 v°.

25 天空が固体あるいは液状かを疑問視する討論である。そもそも、この討論はすでに、中世から始まっており、アリストテレスの同心円の宇宙構造とプトレマイオスの偏心円の宇宙構造との間で折り合いをとるため、星は固体化し透明な天体のなかに埋め込まれているという考えが存在していた。それに対し、16世紀に入ると、ストア派の自然学と宇

義通りに聖書を読み解こうという傾向から、天空の素材を再検討するようになった。ちなみに、初期教会の教父にとっては天空の素材は液状であった。詳細は以下を参照。Michel-Pierre Lerner, « Le problème de la matière céleste après 1550 : aspects de la bataille des cieux liquides », dans *Revue d'histoire des Sciences*, Paris, PUF, 1989, XLII/3, p. 260.

26 Pontus de Tyard, Deux Discours, éd. cit., ff. 33 v° -34 r° .

27 Ptolémée, *Composition mathématique de Claude Ptolémée (Almageste), traduite du grec en français par l'Abbé Halma, tome 2*, Paris, J-M. Eberhart, 1816, p. 116. Livre IX, chapitre II : « Du fondement des hypothèses sur les planètes ».

28 Pontus de Tyard, *Deux Discours*, éd. cit., f. 11 v°.

29 *Ibid.*, f. 34 v°.

30 *Ibid.*, f. 11 r°.

31 Jean Céard, *Oeuvres complètes Tome IV, 1, Le Premier Curieux, ou Premier Discours de la nature du monde et de ses parties, op. cit.*, p. 142.